

目が澄んでいけば

（ルカによる福音書11：29～36、詩編36：1～13）

今朝は、ルカによる福音書11章29節から36節までの、私たちが現在礼拝で用いている新共同訳聖書では、「人々はしるしを欲しがると言う小見出しがついた個所と、もう一つ、「体のともし火は目」と言う小見出しがついた個所の、この二つの個所が、説教のテキストになります。この二つは、密接に繋がっているばかりでなく、実は、前々回学んだ、14節から23節に亘って展開された、「ベルゼブル論争」とも密接に繋がっているのです。否、密接に繋がっているのは当然で、実は、今日の箇所が、その結論、結び、となっているのです。

と言うのは、「ベルゼブル論争」の最中（さなか）の、16節に、「イエスを試そうとして、天からのしるしを求める者がいた」と、記されていながら、そこでは、明確な、それへの主イエスのお答えは示されませんでした。でも、今日の箇所に於いて、主イエスは、はっきりと、これに対して答えられるのです。一層、その求めが強く、激しくなってきたからです。今日の箇所は、こう語り出されています。「群衆の数はますます増えてきたので、イエスは話し始められた。『今の時代の者たちはよこしまだ。しるしを欲しがると云々』」と。群衆が、なぜこの時、主イエスの許に押し寄せて来たのか、と言うと、何か特別な“しるし”が、ひょっとして見られるのではないかと、考えたからで、それを期待して、彼らは、主イエスの許に群がったのです。と言うのは、彼ら、当時のユダヤ人たちは、自分たちをローマ帝国の支配から解放してくれるメシア・救世主の出現を熱願していたのですが、メシア出現の折には、天に奇異な現象が現れる、と、そう信じていたからでした。彼らは、主イエスに、それを期待したのです。この天に現れる奇異な現象、つまり、異象のことを特に、“しるし”と言ったのです。

そんな、その時代のユダヤ人たちに対して、主イエスは、「今の時代の者たちはよこしまだ。しるしを欲しがると、窘（たしな）められ、「ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられない」と言われました。この個所との平行記事は、マタイによる福音書12章38節から42節にも出て来るのですが、そこでは、「ヨナのしるし」とは、「ヨナが三日三晩、大魚の腹の中にいたように、人の子も三日三晩、大地の中になる」（40節）と述べられ、ヨナが、大魚の腹の中で過ごした三日三晩は、外でもない、主イエスが、復活されるまで、三日三晩墓の中におられることの“しるし”なのだ、と、そう説明されています。ヨナは、主イエスの死と復活を予示する、その“しるし”だ、と、マタイは言うのですが、ルカは、それとは異なった見解を示すのです。ルカの場合、ヨナが“しるし”とされるのは、彼が語ったその説教なのです。ヨナは、神に命じられ、ニネベに伝道に赴き、そこで彼が行ったその説教によって、異邦人であるニネベの住民は、王から奴隷に至まで、全住民が悔い改めるのです。何故このようなことが起こったのか、と言うと、それは、ヨナの語る言葉を、ニネベの住民は、神の言葉として、真摯に受け止めたからでした。この出来事を踏まえて、ルカは言うのです。ヨナの説教が神の言葉であったならば、神の御子なる主イエス・キリストの説教は、それ以上に、神の言葉と言えるのではないか。ならば、主イエスが語られるお言葉、即ち、説教こそは、神の国到来の“しるし”、真のメシア・救世主出現の、これ以上ない確かな“しるし”と言えるのではないか。一体これ以上の“しるし”が、他のどこにあると言うのか。それでも尚、これには目を塞ぎ、他に“しるし”

を求めるとすれば、最早、後はただ、あなた方の目は曇っている、あなた方の心は邪悪に満ちている、としか言いようがない。主イエスは、そう言って、群衆の求めそのものが狂っていることを指摘し、これを正され、それをもって彼らに対する答えとされた、と、ルカは説明するのです。

ここには、更に、ヨナと並んでもう一人、“しるし”としての主イエスの説教を際立たせる人物が、旧約聖書から引用されます。それは南の国の女王です。彼女に関することは、列王記上10章1節以下の、「シェバの女王の来訪」と言う小見出しがついた個所に纏まって出て来ます。シェバとは、アラビア半島の南部に位置した古代の王国で、今日のイエメン辺りにあったと考えられています。そこから遙々、その国の女王が、古代イスラエルの第三代目の王ソロモンを訪ねて、エルサレムまでやって来たと言うのです。何のためにか、と言うと、知恵の王として、当時その名を世界に轟かせていたソロモン王から、直々に知恵の言葉を聞くためでした。彼女は異邦人です。にも拘わらず、砂漠の中を、遠路はるばる、道中砂嵐に晒される困難をも厭わず、エルサレムまで、長途の旅を敢行したのです。それもこれも、ソロモンから知恵の言葉を聞きたい一心からでした。ところが、ソロモン以上に、知恵の言葉を語られる主イエス・キリストが、目の前におられると言うのに、否、自ら出向いて来られて、神の言葉そのものである説教を語られていると言うのに、それには真摯に向き合わず、それだけでは不十分とばかり、もっと自分たちを吃驚させるような、凄い“しるし”、つまり、奇跡を見せよ、と求め続ける、今の時代のユダヤ人たちを、最後の審判の日には、南の国の女王、又、ヨナの説教によって悔い改めたニネベの人々は、揃って主イエスと共に審判席に現れ、どうしてあなたたちは、主イエスのお言葉に聞こうとはしなかったのか、と、きっと尋ねるに違いないと、そう主イエスは言われるのです。主イエスは、これを、最後の審判の日には、実際に起こるであろう話としてではなくて、単なる、比喩として、或いは、譬え話として、語られたのだとしても、実に、理に合った、真に、説得力のあるお言葉だ、と、誰もが思うのではないのでしょうか。

ユダヤ人が“しるし”を求める、と言うことに関して、直ぐに、思い出されるのは、コリントの信徒への手紙一1章22節以下に出て来る言葉です。そこでパウロは、こんな風に述べています。「ユダヤ人はしるしを求め、ギリシャ人は知恵を探しますが、わたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝えています。すなわち、ユダヤ人にはつまづかせるもの、異邦人には愚かなものですが、ユダヤ人であろうがギリシャ人であろうが、召された者には、神の力、神の知恵であるキリストを宣べ伝えているのです。神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです」と。彼は実際、これをいやと言う程、ギリシャの都、アテネで思い知らされたのです。アテネと言えば、哲学の都です。何より、人間の知恵が、その根本をなす理性が、尊ばれた町です。パウロは、そのことを意識するあまり、アテネを訪ねた折、専ら、理性に訴えるべく、知恵の言葉を用いて、アテネの人々に伝道を試みたのですが、結果は惨憺たるものでした。彼は、打ち拉（ひし）がれ、ギリシャの港町、コリントにやってまいります。そこで彼は、アテネでの失敗を繰り返さぬように、知恵の言葉ではなく、単刀直入に、十字架につけられたキリストを語ったのです。ところが予期に反し、意外な結果が起きました。何と、コリントの人々は、彼の言葉に耳を傾け、次々と回心者が生まれ、遂には、教会まで誕生するに至ったのです。それがコリント教会でした。新約聖書に収められ、私たちが今でも直ぐ読むことができる、コリントの信徒への手紙一と二は、その後、この地を離れたパウロが、遠隔の地から、この教会宛てに、牧会、及び、指導のため、諄々と書き送った手紙です。そのような関係は、ついで、アテネでは起こりませんでした。知恵の言葉は、実を結ばず、却って、ユダヤ人には

つまりかせるもの、ギリシャ人には愚かとしか思われぬ、十字架の言葉が、意外と思われる程の驚くべき力を發揮して、コリントでは、人々の固い心を打ち砕き、その心を開かせ、素直に、これを受け入れさせ、彼らをキリストの弟子とする、真に豊かな実を結ばせるに至ったのです。だから、パウロのあの言葉は、事実裏打ちされた、証明済みの、これ以上ない確かな言葉と言えるのです。

さて、ここで、33節以下の「体のともし火は目」と小見出しがついた個所に移りたいと思うのですが、一読して、分かったようで、実は、分からない、と言う、何とももやもやした、何時までも、すっきりしない思いを、読む者に残す、厄介な箇所です。でも、あせらずに落ち着いて、整理して読めば、それ程厄介な箇所でもないことが分かってまいります。そこで、先ずは、普通の場合の、光と目との関係を考えてみたいと思うのですが、たとい、光に包まれていたとしても、目を閉じていたり何かで塞いでいけば、闇の中にいるのと同じです。カーテンで窓を閉ざしても、アイマスクで目を覆っても、瞼で目を閉じても、結果は同じで、一切光は体の中に入りません。目は体に光を取り入れる窓なのです。ところで、カーテンにしても、アイマスクにしても、瞼にしても、それらは、外側から目を覆って、光りを遮り、見えなくするのですが、見えなくするのは、そうした外側にあるものばかりではありません。偏見とか、思い込みとか、蔑みとか、妬みとか、悪意とか、普通、色眼鏡、バイアス、と呼ばれるものは、内側から目を塞ぎ、幾ら光が射していても、見えないか、見えても、歪んで見えて、結局は、見えないのと同じ状態に置かれるのです。光と目の間には、このように、複雑で微妙な関係があるのです。この事実を念頭に置いて、今日の箇所を読むと、その前の「人々はしるしを欲しがらる」の箇所との密接な繋がりが見えて来ます。

話を分かり易くするために、途中の説明は全部省いて、直ちに、中心部に入ることに致します。33節に、「ともし火をともして、それを穴蔵の中や、升の下に置く者はいない。入って来る人に光が見えるように、燭台の上に置く」と、述べられています。ここに出て来る“ともし火”、“光”は、イエス・キリストを指しているのです。主イエスは、ヨハネによる福音書1章9節で、光と言われ、「その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである」と言われています。同じくヨハネによる福音書8章12節では、主イエス御自身が、「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ」と、言っておられます。その光は、勿体ぶって自分を隠すようなことはせず、世を照らす光として、何の隔てもなく、誰とでも接しられましたから、誰からもそれは見えたのです。穴蔵の中や、升の下に置かれていたわけではないのです。正しく、燭台の上に置かれていたのです。

これに対して、34節では、目について語られ、こう言われています。「あなたの体のともし火は目である。目が澄んでいけば、あなたがたの全身が明るいが、濁っていれば、体も暗い」と。それは、あなた方の目が、澄んでいるわけがなく、濁っているのは明らかだ、と言う仄（ほの）めかしであり、35節では、「だから、あなたの中にある光が消えていないか調べなさい」と、注意を促されるのです。ここに出て来る濁った目の持ち主とは、直接的には、主イエスからしるしを求めて、殺到した群衆であり、主イエスから、「邪（よこしま）なその時代の人々」と言われた、当時のユダヤ人を指すことは、言うまでもありません。彼らは、目が見えなかったわけではないのです。心の覆いが、折角見える目を覆っていたのです。彼らは、メシアの到来を期待していました。でも、彼らが期待したメシアは、どこまでも、支配国ローマからユダヤを解放してくれる軍事的、政治的なメシアでした。そのメシアは、そのしるしとして天に異象を現わす、と、信じて疑いませんでした。

その願いを主イエスに求めるのですから、彼らに満足な答えが与えられないのは当然でした。彼らの思い込みが、主イエスを正しく見る目を狂わせていたのです。群衆の中には、律法学者やファリサイ派の者たちもいたことでしょう。彼らは、自分たちの知識や教養を自負していました。だから、何の学問も受けていないナザレのイエスなど、歯牙にもかけなかったのですが、でも、気にはなる存在で、彼らの場合は、蔑みや妬みが、見る目を歪め、主イエスを正しく認識することを妨げていたのです。その外にも、主イエスが北辺のガリラヤ、それも寒村ナザレの出身で、前歴は大工だったと知る者は、そんな者に何ができるか、と、てんから馬鹿にし、目も耳も塞いだことでしょう。彼らが、正しく、主イエスの真のお姿を見るためには、心に覆いが掛かっているのですから、これを取り除く以外に他に方法はありません。そのためにこそ、目から真の光を取り入れ、病んだ心を癒す必要があるのです。そして、澄んだ目を取り戻すのです。この時初めて、彼らは、間違いなく主イエスの真のお姿を、見出すことになるのです。このことが起こらぬ限り、彼らは何時までも、しるしを求め続けることを止めないでしょう。でも、それは不可能なのです。何故なら、光は光以外に、自らを証明するものを持たないからです。誰が一体、光をわざわざ、これは光だと証明することができるでしょう。また、その必要があるでしょうか。光は、光自身によってしか、自分が光であることを証明できませんし、また、その必要もないのです。たとい、妨げるものがあるろうとも、それで光がなくなるわけではなく、厳然として、それは光であり続け、受け入れる者に、大いなる恵みをもたらすのです。

今日は聖書朗読の折り、旧約聖書からは詩編36編が読まれました。あそこの10節には、真に興味深い言葉が出て来ました。「(主よ) 命の泉はあなたにあり/あなたの光に、わたしたちは光を見る」が、それです。これは、「あなたの光の中で、わたしたちは光を見る」とも訳せます。私たちは、主イエス・キリストの中で、真の光を見出し、その光によって病んだ心を癒され、いよいよ、主イエスを真の光として知り、その知識を深め、主との交わりを密にして行くのです。

私たちの信仰の歩みが、日々、その道を突き進むものでありたいと願わずにはおられません。

(三輪恭嗣)